

Policy Topics

パレスチナの平和のために できること¹

What we can do for peace with justice in Palestine

宮崎 祐²
Yu Miyazaki

パレスチナとの出会い

私のパレスチナとの出会いは1988年、BBC製作のパレスチナ問題についてのドキュメンタリー番組を見たのが最初だった。幼いころから教会に通っていた私にとっては、エルサレムは聖書の中に登場する平和の都という印象しか無く、その場所で極めて現代的、政治的な紛争が起こっていることに、少なからぬ衝撃を受けた。

人間にとって国を持つとはどういうことかを始めて考えさせられた。人と人とお互い平和に暮らそうと思っても、政治が絡むとそれが適わなくなる場合があるということも、私はパレスチナを通して初めて知った。

ゼミの学生と共に

私は学生の皆さんに、私がパレスチナで見聞きしたことを伝えるだけでなく、パレスチナの平和のために一人一人ができることを一緒に考えてみたかった。パレスチナの平和のために、ということに限らず、そ

れぞれが持つ感性や得意分野を活かして、自分の力を誰かのため、社会のために使うことが、豊かな生き方なのではないか、ということ。

最初に2人一組になってもらい、こんなワークを試してみた。5枚のカードを配る。カードには1枚に一つずつ、次の項目が書かれている。①政治的な安定②経済的な安定③社会的な安定④精神的な安定⑤家族、友達、恋人との安定した関係。自分が平和であるために、この5つの項目のうちどれが一番大切か選び、ペアの人と話し合っ、第1位から第5位まで順番に並べてみる。正解があるわけではない。自分にとって一番何が大切と思うか、理由を話し合っ順位を決めてみよう。

この日は5組のペアができたが、偶然にも、それぞれが1位にあげた項目はすべて異なっていた。自分たちが1位に挙げた項目とその理由を聞いていくと、着眼点や考えの道筋、自分にとってのリアリティなどが浮かび上がり興味深かった。「社会的安定」を選んだペアの「生活が守られることが大切だと思ったから」との言葉が心に響いた。パレスチナを訪問するたびに、生活が破壊されている、と痛感するからだ。イスラエル側が「安全のため」とする分離壁やフェンスにより、パレスチナ人の町・村は分断され、学校や仕事、農地に行くこともままならない。さらにチェックポイントで厳しく移動を制限される。経済活動も制限され、失業率は60%を超える。難民キャンプの人々は貧困ライン以下の生活を強いられている。

パレスチナで出会った人々

私がこれまでにあったパレスチナ人からきいた言葉で、印象に残っているものを紹

¹ 本稿は、2009年7月3日(金)に行われた総合政策学部研究講演会における講演内容の報告である。

² 財団法人大阪YWCA幹事

介したい。

ベツレヘム近郊、ディヘイシャ難民キャンプのイブダー文化センターのディレクター、ジャード・アッパースさんの言葉。(イブダーはアラビア語で「無から創造すること」の意味。センターは女性、子ども、青年のための文化活動施設<http://www.ibdaa194.org/>)「自分の子ども時代は、文字を書くことよりも先に石を投げることを覚えた。それが生活の一部だったから。これからは子どもたちにも文化や芸術を通じた抵抗を伝えたい。」

パレスチナYWCAの総幹事アブラ・ナスイルさんの言葉。パレスチナYWCAは東エルサレムYMCAと共同で、全世界に「オリーブの木キャンペーン」を呼びかけている。分離壁建設や土地の接収のため、イスラエル軍によりパレスチナのオリーブの木が10万本以上根こそぎにされている。その場所へふたたびオリーブの苗木を送ろうというもので、1口3000円で1本の苗木を送ることができる。「オリーブの木キャンペーンの意味は『希望を絶やさずに持ち続けること』だと思う。アラブには『私たちが植えたものを次の世代が受け取る』ということわざがある。オリーブの木はまだ若く、実をつけていないが、やがて実際的な意味でも象徴的な意味でも実りをもたらすと信じている。」

昨年9月ホームステイさせてもらった、ベツレヘム、アッザ難民キャンプのおばあさん。「4歳のときに第一次中東戦争が起こり、故郷のベイトジブリーン村から歩いて逃げてきた。そのときのことは余り覚えていない。」現在60歳の彼女は、それ以来難民キャンプで生活している。子どもが13人、孫が60人近くいる。学校帰りの孫の面倒を見、嫁の実家を手伝って市場に出す前のモロ

ヘーヤの葉をきれいに摘み取る手作業を引き受け、家を片付け、お祈りの時間になれば欠かさず礼拝を持つ。仕事がなければ時間を持って余す男性陣も多い中、「毎日忙しくて時間が足りない」。女性はどこの社会でも忙しい。

マフムード・ダルウィーシュの詩

マフムード・ダルウィーシュはパレスチナの詩人である。パレスチナ人のアイデンティティや抵抗を表現する作品を多く残した。そのダルウィーシュの詩にサーブグリーンというバンドがメロディをつけた。サーブグリーンはエルサレムで活動する音楽グループで、音楽や演劇などのアートを通して、占領によりトラウマを負った子どもたちの癒しを目指すワークショップなども行っている。(http://www.sabreen.org/英語ホームページだが一部楽曲の視聴もできる)「人間について」という歌はパレスチナ人の置かれている状況を物語っている。明るく静かなメロディにのせて不条理を訴える。アラブの伝統的な楽器が用いられているが、アラブ音階ではなく、私たちの耳にもなじみやすいメロディだ。

「人間について」

唇を鎖で閉ざされ、
死の岩に両手をつながれた。
それなのに「お前は人殺しだ」と言われる。

食べ物も奪われ、着るものを奪われ、
旗も取り上げられ、
死の牢獄につながれた。
それなのに「お前は盗人だ」と言われる。

あらゆる港から追放され、
 小さな恋人を奪われた。
 そして「お前は難民だ」といわれる。
 (英文歌詞カードより訳出：宮崎祐)

平和のために自分にできること

平和のために非暴力的な手段で活躍している人たちの例をいくつか紹介したい。ニューヨークを拠点に活躍するコメディアン¹のディーン氏は、ユダヤ人コメディアンと共にパレスチナ問題を題材にコメディを披露する。You tubeでも動画を見ることができる。(P-navi infoに関連記事 <http://0000000000.net/p-navi/info/info/200502202351.htm>)

パレスチナ問題からは離れるが、イラン革命の時期に少女時代を過ごしたイラン出身のイラストレーター、マルジャン・サトラビ氏は、「ペルセポリス」という漫画に自分の半生を描いた。2007年に作品が映画化されたとき、彼女は実写ではなくアニメーションという手法を選んだ。肌・髪・目の色など見た目が自分と違えば、見る者にとって遠い世界の出来事として終わってしまうのではないか。漫画の方が、自分自身と重ね合わせて見られるのでは、という発想からアニメーションという手法を選んだそうだ。(映画「ペルセポリス」公式HP <http://persepolis-movie.jp/>)

授業の最後に、学生たちがパレスチナの平和のために自分にできると思うことを発表した。短い時間で考えたにも関わらず、よい意見が多く出された。見ること、知ること、伝えること(特に日本で) / 人と交流し続けること。パレスチナ人を日本に呼びたい / 本やテレビでは分からないことがある。実際に現地に行ってみたい / 飛行機

のチケットを安くして、互に行き来がしやすくなったらよい / パレスチナという紛争のニュースしか知ることがない。テレビにパレスチナ人芸能人が登場するようになったらよいと思う / 両者の不満、本音、気持ちを知ること、汲み取ること。学生たちの柔軟な感性、細やかな優しさ、アイデアに感動しました。また、この日のゼミに出席されていた「キリスト教と文化研究センター」講師、オムリ・ブージット氏の「イスラームを正しく知ることにも必要」という言葉も付け加えておきたいと思います。

